

外国語における

Listening Skill の開発をめざして

小 谷 悠 紀 子

Communication,, is behavior in which the initiator of the communication seeks (whether successfully or not) to arouse certain internal processes in the recipient of the communication and possibly to secure certain overt responses on his part. J.B. Carroll^①

予測 (prediction) は、言葉を思考に向かわせる重要な要因であるばかりではなく、現実を理解する尺度でもある。言語によるコミュニケーション過程において、「聴き手」が「話し手」の発話を正しく理解したということは正しい予測が「聴き手」に働いていたことを示すものである。

「思考」や「イメージ」の研究領域が脚光を浴びている陰で、予測活動に関する研究や実験はいまだ手がつけられていない状態にある。その理由は予測が目に見える実体でなく、「思考」「想像」「概念」等との区別が明確になされていないことにある。しかし、話し言葉における効果的なコミュニケーションの開発にとって、聴き手側に働くこの予測活動の機能は無視されてはならない。本稿では、前半で予測と言語との問題を、後半で予測と経験との関連性を探求することによって、この予測活動が言語機能の中で「聴くこと」、「読むこと」のスキル向上にいかに関与することができるかを指摘する。

I 予測と言語

われわれが「聴く」行為から思い出すことは、それが非常な忍耐を伴う場合と逆に積極的に聴く行為を継続したい気持ちになる場合とがある。聴く行為の過程には、発話が即ちに理解に直結するルートと、直結せずには回り道をして理解に到達するルートとがある。後者の過程は聴き手が自己の予測をたてながら同時にその予測を検証する聴き方であり、話し言葉のコミュニケーションに於いてそれは瞬間的なものではあるが複雑な予測の検証といったゲームを展開する聴き方である。聴き手が意欲的に聴くことは検証ゲームが聴き手にとって好ましい方向に進んでいることを意味する。なぜならば、自己の予測が正しかったことに聴き手は知的満足を感じ、その充たされた気持ちが聴く行為をさらに積極的に向かわせるからである。音声言語を一義とする立場から、言語教育における言語学習に対して聴き手に知的満足を感じさせる状況を創り出すことがまず考慮されなければならない。

しかし、聴くことがこの様にいつも精神的刺激を伴うものとはかぎらない。発話が送られても予測がまったく生じない場合がある。こういったケースは二通りある。すなわち、聴き手にとって発話内容が容易すぎるか、または逆にむずかしすぎるといった場合である。たとえば、B. Bernstein

の言語コードで、‘restricted codes’のみの発話を大人が聴いた場合、あるいは‘elaborated codes’のみの発話を幼児が聴いた場合に起る現象である。この状況では、発話内容と受容者間との知的ずれが大きすぎることに、予測の検証活動も起らず聴き手は知的満足を味うことは不可能である。したがって、聴き手に効果的な発話伝達ができないばかりか、最悪の場合発話は言葉としての本来の機能を果たせず、雑音（noise）に変化してしまうことも考えられる。このように発話の理解と予測との間に密接な関連があることから言語によるコミュニケーション研究にとって予測の存在は無視されてはならない。外国語教育において、この予測を様々な角度から考察することにより、「聴くこと」のスキル開発に新しい発見が期待できるのではないだろうか。

予測活動は発話が送られると同時に開始され、これが聴き手の頭脳を刺激し、それに伴い精神活動が起る（思考活動と言われるもの）、その結果発話への理解がなされる。したがって、この予測は思考活動を通じて聴き手を理解させるレーダーの役割を果たしている。予測は言語形式をもっているが、それは言語構造にみられる精密かつ体系だったものではなく、四方八方に広がる迷路のようなものである。その予測活動に正しい方向を与えるものは話し手の発話と聴き手の言語能力である。このように予測には発話の正しい理解をさまたげる複雑な障害的な機能がありながら、一方では予測が生じることによって発話の理解に多様な屈折が生まれ、そのことが聴き手の思考活動を活発にさせ、コミュニケーションを積極的に押しすすめるといったまったく別の機能がある。したがって、この予測機能の効果的な使用法を研究することは思考活動を高め、また言語を発展させることにもなるのである。その上、聴き手にいかに豊かな予測を生じさせ精神活動を高めさせるかの探求は、コミュニケーションにおけるスキルの開発に新しい方向を示すであろう。予測が何も起らずに発話がたやすく理解できたとしたら、それは発話に対する聴き手の単なる確認作業にすぎず聴き手の精神活動を高めたことにはならない。したがって、そのようなコミュニケーション活動は言語の情報獲得手段であって、言語教育がめざす真の言語学習ではない。情報獲得手段としての言葉の習得は無意図的教育を通じ自然に獲得される外言である。言語教育の中においてわれわれがめざす言語学習は、複雑で反抗的で決定をせまられる予測を通過した個性的、客観性に富んだ言語を獲得することにある。

予測が起る状況をさらに具体的に記述することは言語と学習の新しい視点を探求する上で利益をもたらすことになるであろう。ここでは主に外国語を聴く力と予測力との関連に焦点をあてながら、音声言語によるコミュニケーションの状況を三つに分けて考察する。それらは、①母国語による大人：大人、子供のコミュニケーション、②母国語による大人：子供のコミュニケーション、③外国語によるコミュニケーションである。

①の場合

これがもっとも一般に行なわれているコミュニケーションの形式で発話を正確に伝達することにおいては三つの中でもっともすぐれた活動である。しかし、ここではこのコミュニケーションが陥りやすい問題点をいくつか指摘してみたい。それは発話に対して予測活動や思考活動が伴わない言語理解であったとしても、発話を正確に伝えることができさえすればもっともすぐれたコミュニケー

ション活動であるとする考え方である。言語機能を単に情報獲得手段と考えた場合にそれは正しい考え方であっても、言語を精神活動を高めるものと考えた場合には適切な考え方とは言えない。ここにおいて問題としたいコミュニケーションは言語教育の一環としての言語の伝達であるから、発話が聴き手に伝達される際に必ず思考活動が伴うことが条件である。その為に発話者は聴き手の言語能力や言語知識を把握しようと努める態度を常にもつこと、聴き手の行動に常に関心を払い積極的に聴くことが継続されるよう努めることである。一方聴き手は発話にまず集中し、発話を通じて自ら予測し検証活動を活発にさせるように心がけることである。

②の場合

子供は大人の発話すべてを理解しているわけではない。これは子供がいまだ所有していない言語モデルを大人が使用することによって生じる現象である。その際、子供は自己の言語尺度を基準にわからない発話の部分はわかる発話の部分から引き起こされる予測の力をかりて、何とかして大人の発話を理解しようとつとめる。その場合に子供の中に生じた予測は発話理解に重要な機能を果たすことになる。子供は大人の発話を正しく理解できたと自らは考えるが、実際は大人の意味したものと多少異なった解釈をすることになる。しかし多少誤った解釈をしたとはいえ、このようなコミュニケーションの活動はけっして無益なものではない。なぜなら、発話を送られている瞬間、子供はその発話を解釈しようと真剣な推量ゲームに取り組み、めざましい精神活動を行なっているからである。もしこの推量ゲームに勝利を得れば、その子供は聴くことに対する興味や言語のおもしろさを知り、コミュニケーション活動はさらに望ましい方向に進むことになる。たとえ大人が意味したものと異なった解釈をしたとしても、聴き手である子供が大人の発話内容に何らかの関心を持っていれば、聴く姿勢は継続され、予測活動と共に思考活動も起るので意欲的なコミュニケーション活動が成立するのである。

この過程における予測の機能は、①で示されたものとは異なる。すなわち①では、発話をより正しく理解するように、またより精神的刺激を得るために予測が働くのであるが、②では大人の発話理解の為に予測が子供にとって不可欠の存在で、表出された言語では理解できない部分を子供は予測に依存するのである。したがって、後者は前者より予測への依存が強いのでそれだけ言葉によるコミュニケーションの正確度は低いことになるが、予測活動が活発に起これば前者とは異なった面で思考活動を高めることができる。子供にとって大人とのコミュニケーションの意義はまさにここにあると言えよう。この種のコミュニケーション活動は、次に述べる外国語によるコミュニケーション活動と相通ずるところがある。すなわち、発話だけでは明確性を欠くコミュニケーションが予測の力をかりて思考力を伸ばすことに貢献するのである。言語を媒体に正しい予測をいかに迅速に子供に生じさせ、また言語によっていかに子供の心をとらえるかがコミュニケーション活動を発展させる課題となろう。

③の場合

外国語の習得程度により予測の現われ方がかなり異なってくることから、ここでは外国語の四つの言語技能を同程度に習得し外国語を約五年間学習して得られた外国語能力を前提としたコミュニケーション活動を考察する。母国語によるコミュニケーションと決定的に異なっていることは外国

語の場合、一文だけの発話では、発話には表われない言外の意味を推測することができないことである。母国語の場合は、一文の発話解釈決定のための言語知識やコンテキストや言語習慣がそなわっていることにより正しい予測が生じやすい。しかし外国語の場合は発話が外国語であるためにきわめて限られた言語経験の中から一文の発話の意味を推測しなければならず、その場合予測が生じることがあっても、その予測の正しさを決定するコンテキストや言語知識が不十分であるために、全体的内容を正しくとらえることができない。したがって、外国語のコミュニケーションが母国語による場合と同じ機能を発揮するために次の様な考慮が払われなければならない。すなわち、できるだけ豊かな予測が生じるよう発話内容や聴かせる方法を工夫することである。たとえば、一文一文を切りはなして聞かせるのではなく、必ずパラグラフ単位で発話を流すことは効果的な方法である。これは外国語による発話理解のために内容的にまとまりのある言語場が不可欠であることを示している。これまでの外国語による「聴くこと」の学習においてはこの点に関する実践研究が立ち遅れている。

このような事が考慮されれば、外国語によるコミュニケーションの意義は思考力を伸ばすことに見出されるであろう。外国語を聴いてわかることは、いままで母国語では刺激されなかった部分が刺激を受けたことを意味し、そのことが表現行動の新しい創造をも可能にし、新しい人間関係を確立する基盤を生み出すのである。それはまた外国語本来の言語機能の一面を意味するものである。

上にのべた三つのコミュニケーションの活動は予測活動を中心に考察されたが、それぞれの状況に応じ予測の果たす役割が異なることが示された。その中で外国語によるコミュニケーションが予測への依存が強いことに注目すべきであろう。次にわれわれの関心は予測の過程を知ることである。そのために予測の本質を究明することが必須であるが、冒頭においてすでに記したようにあいまいなる予測の実体を明確にとらえることが困難である以上、本稿では予測を生み出すベースと考えられる経験に焦点をあて、言語と経験との関連から予測の解明を試みることにする。

II 経験と言語

人間の対話の多くが経験を基盤に成り立っていることから、ことばの成立を経験との深いかわりをぬきにして考えることはできない。いやむしろ、経験がことばを発展させていると考える方が妥当である。すべての人間は異った経験を持ちながら社会の中で生き続ける。その意味でわれわれは経験を森有正氏の言葉により次の様に定義することができる。「経験ということは、何かを学んでそれを知り、それを自分のものとする、というのとは全くちがって、自分の中に、意識的にはなく、見える、あるいは見えないものを機縁として、なにかがすでに生れて来ていて、自分と分ちがたく成長し、意識的にはあとからそれに気がつくようなことであり、自分というものを本当に定義するのは実はこの経験なのだ、ということの理解を含みます。^②」自己と全く同じ経験をもつ人間が存在しないことにより、一個の人間を定義するものが経験の意味なのである。このように経験は一個の人間の個性を規定する重要な要因となる。そして、この経験が言語と深いかわりをもつようになるのは人間に次の様な本能的行動が存在するためである。すなわち、人間は経験を通じ

て形成されたユニークな個性を自己の中に大切に保持し他人に秘密にしておきたい意志を強くもちながら、他方ではその新しい発見を他人に伝えたい衝動にかられることである。人間がたえず自己表出の衝動にかりたてられるということは、経験を言語化したい欲望が潜在することを示すものであり、同時に社会の中で人間が生きてゆく過程にはいつも新しい発見が伴う事実を示すものである。そして、一人一人の人間が異なった経験を持つということは、かれらすべてが異なった言語のスタイルの持主であることを示唆している。

次に、その経験がどのような過程で言語に変化するのか考察してみたい。人は一般に新しい発見に直面している瞬間、その発見を伝える言語は生じないものである。それは新しい発見と自己との対決が思考活動を停止させるために生じた現象と思われる。また、経験時に経験者は事象に対し参加者 (participant) の立場をとり、客観的な第三者の立場、傍観者 (spectator) になることができないとも考えられる。このことは詩人が感動にひたっている時に、その感動に対する表現が創造できないことから明確であろう。経験が言語化されることによってはじめて経験者は事象に客観的な傍観者の立場をとることができるのである。すなわち、経験の言語化とは人間が経験と一体化になることから、人間が経験と分離し、経験が事象と一体になることを意味する。これにより経験は真実のものにより接近し、一方人間は事象を理性的に視るようになるのである。

J. Briton が指摘する経験の言語化とは、「言語で経験を再現 (representation) すること」である。^③ 聴き手は言語による経験の再現を耳にし、自己の経験を思い出そうと言語を探し、その言語がみつかると思いが明確になる。自己の経験の再現化が容易であればそれだけ聴き手は発話内容を正しく理解できるのである。その意味で、経験の再現とは話し手・聴き手の自己変革である。ここでは特に経験と予測との関連において聴き手の自己変革を中心に論をすすめる。ある言葉を聴くことによって聴き手が経験の再現を容易にすることができれば、精神活動も刺激を受け聴くことの行為は積極的なものとなる。経験が豊富でしかも複雑であればあるほど、発話解釈過程では思考活動がめざましくなり、一つの解釈をめぐるさまざまな予測が生じ、それに応じて多様なイメージも起こる。その結果得られた解釈は自己の言語力に複雑な変化を与え、現実理解においても新しい考え方が生みだされる。このように、経験と予測の間には発話理解の過程で密接な関係が存在する。

経験の再現を決定する重要な要因は、聴き手の言語知識、言語技能、経験の有無の三つである。これらは効果的なコミュニケーションが継続される条件とも言えるもので、コミュニケーション論のベースとなりうるものである。これらの要因の中で、特に外国語を教える場合を考えてみると、われわれ日本人が日本で外国語を教える際、外国語の知識や技能を母国語以上は深く習得させることは一般に無理であり、すなわち前者二つは努力によりマスターできる種のものではなく、伝統的慣習の要素が強く環境に大いに左右される。しかし、経験の有無に関しては、自らの意志によって行動が行なわれるものであるから、言葉による経験の再現を容易にするために効果的な準備態勢を整えることは可能であろう。森有正氏が「経験というのは人間が、自分の中に生れたある特定の事態に基づいて、自由を具体的に直感する場所にほかならない。」と書いているように、経験が自

己そのものであるとしたら、人間にとってこれほど自由が重要な意味をもつものは他にはないであろう。

経験する行為は限定のない自己の選択に全く負かされているが、経験の行為が言語を発達させるためには経験に対するすぐれた選択が要求されることになる。経験に於いて賢い選択をすることができた人間のみが自己の目標にもっとも接近した位置で活動ができるのである。この様に考えると人間にもっともすぐれた経験の選択をさせることはまさに教育がめざすべき目標ではないであろうか。すぐれた力強い言語は、すぐれた経験を選択することからのみ生じるのである。外国語学習においても然り。言語知識や言語技能の向上にばかり関心を払うのではなく、言語活動の背景をなす全体的なもの（たとえば、歴史、民族、社会、生活）に視線を投ずるべきである。すなわち、これは全体的なものから、部分を理解する方向であり、言語の深さを追求するというよりはむしろ言語の幅に視点をのけた外国語学習への実践をめざす方向である。

註 ① Carroll J. B., 'Language and Thought',
Prentice - Hall. Inc., 1964, p 110.

② 森 有正 『遙かなノートル・ダム』,
筑摩書房 1967, p 151.

③ Briton J. 'Language and Learning',
Pelican Book, 1972.

④ 森 有正 前掲書 p 43.